

「世界農業遺産」認定をめざして

第1回 モニターツアー企画

琵琶湖と共生してきた

“滋賀の農山漁村”の魅力を知る！



～ 日本で唯一、湖で人が暮らす島「**沖島**」を散策し、
漁師さんの話を“聞き””味わい”そして
「**魚のゆりかご水田**」を”知る”～

記録集

日時 : 2017年6月5日(月) 9:00～17:15



「琵琶湖と共生する滋賀の農林水産業推進協議会」設立準備会

開催目的

滋賀がめざす「世界農業遺産」のことをより深く知っていただき、魅力的な滋賀の農林水産業を発信していくため、「モニターツアー」を開催しました。

今回は、日本で唯一、湖で人が暮らす島「沖島」を散策し、漁師さんのお話や、地域を元気にするため沖島に移住を決められた学生さんのお話を聞きながら、琵琶湖ならではの湖魚料理を楽しんでいただきました。また、ニゴロブナなどの湖魚が琵琶湖から水田に遡上して産卵し、また琵琶湖に戻っていく、そんな豊かな生きものを育む「魚のゆりかご水田」の現地を御案内し、ツアーモニターとして御意見等をいただきました。

プログラム

1. 日 時：6月5日（月）
2. 行 程
 - 8：45 大津北口駅 集合（9:00 出発）
 - 9：50 近江八幡駅南出口 集合（10:00 出発）
 - 10:35 堀切港「おきしま通船」
 - 10:45～12:05 沖島散策（ボランティアガイドさんの話）
沖島の漁師さんの話
 - 12:05～12:45 湖魚料理（沖島の湖島婦貴の会の手作りお弁当）
沖島に移住された滋賀県立大学の学生さんと交流
 - 13:00～13:40 （移動）
 - 13:40～15:00 東近江市栗見出在家町
現地見学（魚のゆりかご水田見学と生きもの観察）
地元農家さんや滋賀県立大の学生さんのお話など
意見交換会（今回のツアーに対する御意見など）
 - 15:00～ ファーマーズマーケット「きてかーな」
 - 16:15 近江八幡駅 解散
 - 17:15 大津駅 解散
3. 参加者：38名

主催

滋賀県・「琵琶湖と共生する滋賀の農林水産業推進協議会」設立準備会

日本で唯一、湖で人が暮らす島「沖島」

近江八幡市の堀切港から、おきしま通船の船で約 10 分。沖島漁港に到着。

早速、沖島漁港の玄関口といえる「沖島漁業会館」前に集合し、沖島の散策がスタートしました。



沖島散策 西居 正吉さん（沖島のベテランツアーガイド）

漁港付近から歩きはじめ、ガイドの西居さんから、緊急時に利用される沖島の「消防艇」や光ケーブル設置の状況など、離島でも住環境が整備されていることなどを説明していただきながら、沖島小学校へ移動しました。沖島小学校の生徒は、現在 23 名でそのうち 21 名は島の外から通っておられるそうです。



ガイドの西居さん

島には、神社や仏閣など歴史的な点も含め、まだまだ紹介したい所がたくさんあるということでしたが、残念ながら今回のツアーでは時間の関係でここまでの御案内になりました。参加者の皆さんには、ぜひまた 2 回、3 回と沖島へとお越しいただくようお願いしました。



沖島小学校



消防艇

沖島の漁業について

奥村 繁さん（沖島漁業組合 組合長）

沖島の散策を終え、漁業会館にて沖島漁業組合の奥村組合長さんから琵琶湖の環境の変化や資源保護に配慮した沖島の伝統的な漁業について、お話をいただきました。

また、漁業に使用する伝統的な漁具を御紹介いただきました。手長エビやスジエビを獲るエビタツベや、割竹等で作った漏斗状の口から入ってきたウナギを閉じこめて捕獲する筥（うけ）という漁具を見せていただき、現在は、こうした竹でなくプラスチックを使った道具に変わったこと、次第にこうした漁具をつくる店も少なくなってきたことなどを説明いただきました。

長年、漁師をしてきて感じている琵琶湖の魚の減少については、様々な要因があると思うが、これ以上琵琶湖の環境が悪化することがないようにしないとイケない。ニゴロブナやホンモロコといった売れる魚については、増やす方策をとっているが、琵琶湖には、昔はもっと多様な魚がいたので、そうした環境に戻すことを目指していきたいといった思いも語ってくださいました。

また、5年前に秋篠宮家の眞子様が沖島にお立ち寄りになる機会があり「鮒ずし」の漬けこみに興味をお持ちくださったエピソードなども御紹介いただきました。



その他、ツアー参加者との主な質疑の内容を紹介します。

Q：現在の沖島での主たる漁獲は何ですか？

A：いろいろとあるが、漁獲の中心はアユで6割ほどあります。

Q：ビワマスについては？

A：ビワマスは琵琶湖の宝といわれ、たいへん美味しい魚です。昨年東京で開催されたF-1（フィッシュワン）グランプリで県漁連がビワマスの親子丼でグランプリを受賞しました。

沖 島

沖島は、日本では淡水湖に浮かぶ島として唯一の

“人が住む島”です。人口：約300人、120戸（H27）

沖島の歴史は古く、紫式部の歌に

「おいつしま 守りの神やいますらん 波もさわがぬ
わらわえの浦」と詠まれています。

島の伝承によると、島に人が住み始めたのは、保元・平治の乱（1156年～1159年）の戦いに敗れた源氏の落武者が沖島に漂着して住み着いたということです。（沖島漁業協同組合HPなどより）



～沖島散策の様子～



沖島に移住をされた滋賀県立大学生さんのお話

久保 瑞季 さん (滋賀県立大学 3年)

大阪の街の中で生まれて育った久保さんにとって、滋賀県の大学に初めて来たときは、正直に“田舎だな”と思ったそうです。しかし、次第にそれが魅力的に思えるようになったそうです。以下は久保さんのお話です。



大学の授業で「沖島」のことを聞いて関心を持ち、沖島での「もんでクラブ」という母親世代の活動を聞いて惹かれたのがきっかけ。沖島のことを知るうちに、過疎化や少子高齢化の中で、「学生が何かしないといけない」との思いから、学生が沖島を支えるプロジェクトをつくってお祭りなどの自治会活動に関わるようになりました。

沖島の魅力は、初めて来たときに感じた、すごい生活感や懐かしい感じ。理屈なく「いい島だな」と思いました。人の息づかいが分かる場所だと思っています。

大阪に住む私の父は、琵琶湖の魚が食べられるとは思っていなかったようで、実際に食べて美味しいことがわかったと言っていました。大阪の人にも、もっと滋賀のこと、沖島のことを知ってほしいと思っています。

なぜ移住するか？ですが、学生の活動として「沖島写真展」などをやってきて、沖島を支えるために学生ができることが何かないか、ずっと考えていました。そのなかで、学生がすぐに何かを変えることはできませんが、ずっと関わることできればと思い、まず私が住めばいいのではないかと考えました。

Q：(奥村組合長さんへ) 久保さんが島にこられてどうですか？

A：若い人来ていただいてうれしいです。(奥村組合長)

滋賀県立大学 3年 久保瑞季さん

大学の講義で島民から島の生活などを聞いたことをきっかけに、沖島に興味を持ち、昨年、学内で地域行事やイベントの手伝いを行う学生のプロジェクト「座・沖島」を立ち上げ。沖島の方々と交流していくうちに、漁師の暮らしに密着して島民の生活を伝える観光ガイド活動などを通して、沖島の魅力を発信したいと移住を決断。

沖島の湖魚弁当

沖島の皆様と交流しながらの昼食会

沖島の婦人会「湖島婦貴(ことぶき)の会」の皆様による地元食材を使った手作りお弁当。

(沖島のお弁当は、予約にて承っております)



東近江市栗見出在家町「魚のゆりかご水田プロジェクト」

次に訪れたのは、東近江市栗見出在家での「魚のゆりかご水田」の現地です。現地では始めに地元の「栗見出在家魚のゆりかご水田協議会」の皆さんのお出迎えをいただき、湖魚がのぼってくる田んぼの水路へ御案内いただきました。

「魚のゆりかご水田プロジェクト」生きもの観察会

大塚 泰介さん（琵琶湖博物館 専門学芸員）

この時期、「魚のゆりかご水田」では、琵琶湖からニゴロブナなどの湖魚が排水路を伝って田んぼに遡上し、田んぼで多くの稚魚が誕生しています。

参加者の皆さんにも、たも網を持っていただき、どのくらい多くの生き物たちが、水路にいるのかを体験していただきました。排水路には、ニゴロブナの稚魚やドジョウ、スジエビ、タイコウチ、コオイムシなどの湖魚や水生昆虫など、多数の生きものを短時間で採取し、早速、用意していたトレーなどに生きものを入れて、琵琶湖博物館の大塚専門学芸員から説明していただきました。

フナは、この時期に数cmになっていましたが、田んぼ以外の場所で孵化した場合、生後1か月程度でここまで成長することはありません。ここまで、大きく育つのは、田んぼにはミジンコなどの餌が豊富で温度も温かいことや、ブラックバスなどの外来魚も来ないので、安心して成長できるからです。田んぼの水を少しすくっただけで、沢山のミジンコが獲れたことなど、田んぼがお米をつくるだけでなく、多くの生きものが育まれる場所であることを説明いただきました。



「栗見出在家魚のゆりかご水田協議会」の活動について

今堀 治夫さん（栗見出在家魚のゆりかご水田協議会）

栗見出在家の魚のゆりかご水田のこれまでの活動についてビデオにより御紹介いただきました。以下は、今堀治夫さんのお話です。

栗見出在家では、自治会や子ども会と連携して活動としており、農家だけでなく非農家も含んで学区全体の活動になっています。「魚のゆりかご水田」をこれまで10年間続けてきた中で、様々な問題もありましたが、地域の団結力によってこれまでしっかりと続けてくることができました。

「魚のゆりかご水田」の活動は、「環境こだわり農業」と車の両輪の関係にあります。地域の農協などと調整していくなかで「カメムシ防除剤」の使用もやめるなど徹底した環境こだわり農業を今後も追及していくつもりです。

また昨年「魚のゆりかご水田の酒米（山田錦）」によるお酒づくりも、蔵元さんの御支援により行っています。絵本作家の方に、田んぼにやってくるナマズをイメージしたラベルを作っていただきました。お酒の名前は「ぷくぷく」といいます。近江八幡市の農産物直売所「きてか〜な」でも販売されています。



栗見出在家の魚のゆりかご水田協議会の皆様



「魚のゆりかご水田米」のお酒 「ぷくぷく」

今年初めて作られた すっきりとした 辛口のお酒。

近江八幡市の農産物直売所「きてか〜な」でも販売されています。



「一筆型水田魚道でのニゴロブナ遡上に関する研究」について

原田 一毅さん（滋賀県立大学 修士2年）

山本 貴大さん（滋賀県立大学 学部4年）

一筆魚道においてニゴロブナが遡上できない要因を探る研究について、滋賀県立大学の原田さんと山本さんから発表いただきました。

県立大学の皆川研究室のお二人が、どのような課題を解消すれば、一筆魚道においてもニゴロブナが簡単に遡上することが出来るのかを研究したものです。



山本さん（左） 原田さん（右）

栗見出在家地域では、これまで排水路の全面堰上げ魚道が中心でしたが、さらに取組面積を広げていく際に、地形上の問題等があります。全面堰上げが難しい箇所については一筆魚道を設置してきましたが、なかなか思うように成果がでないことがあったことから、このような研究が行われました。

今回は、その研究の成果の一部を発表いただきました。今後とも継続して調査研究を進めていただき、また次回、研究成果を発表していただけることを楽しみにしています。



観察会の準備に携わった琵琶湖博物館や
滋賀県東近江農業農村振興事務所の職員

～生き物観察の様子～



御参加ありがとうございました。